

事例③（長崎県教育委員会の研修会）

- 研修名**：令和6年度体験活動・ボランティア活動及び地域における学校との連携・協働活動のコーディネーター養成研修
- 目的**：学校教育と社会教育の関係者が、コミュニティ・スクールや子どもに関わる各種団体の活動事例を通して、学校と地域の連携・協働の進め方について考える。
- 主催者**：長崎県教育委員会
- 開催日時**：令和6年9月13日（金）
13時30分～16時45分
- 会場**：長崎県教育センター（別館4階 講堂）
- 講義**：「地域学校協働活動を進めるために」
子どもを育む「縁」を結ぶ
～つながる、つなぐ、わかちあう～



- 講師**：全国体験活動ボランティア活動総合推進センター
コーディネーター 興梠 寛 氏
- 受講対象者**：教職員、社会教育関係者、地域学校協働活動関係者、家庭教育関係者、地域子ども教室等関係者 福祉・まちづくり関係者等
- 参加者数**：55名
- 研修内容**：

講義

- ◎コーディネーターの6つの役割
- ◎よりよいコーディネーションのための6つの方法
- ◎志しは高く、ボランティアのハードルはより低く！
- ◎地域と学校を結ぶ協働活動の推進事例
- ◎学校にボランティアルームを開設しよう
- ◎コーディネーター研修でスキルアップ
- ◎パートナーシップの時代をひらく無限に広がる公民館の可能性
- ◎ボランティアリズムの2つの選択肢
- ◎ボランティアラーニングについて
～私が変わる、社会は変わる

<主な感想等>

○「ハードルは低く、志は高く」がぐっときた。

○スクールバスから降りてくる子どもへ挨拶するボランティア、そんなボランティアもありな

んだと勇気もらった。

○「ボランティアとは」今までとは全く違うことに気が付いた。

○地域に出ていく、入っていくことが大切だと思った。

○もっと聴きたかった。時間が足りない。

○子どもたちが上からの押し付けではなく、自分たちの力で出来上がったプログラムを発表、実践。子どもたちは、また、ふるさとに帰ってくることだろう。

○グループワークの後、講師へ質問ができるのはよかった。

○いろいろな角度でコーディネーターの役割を理解することができた。